

「こんな障がいがあるのですが、可能でしょうか?」。私たちのゲストであるアダプティブ(障がい者)の人々から、スキースクールへこんな問い合わせがよくあります。

挑戦したことのないことに人が不安を抱くのは、ごく当たり前。でも、アダプティブの場合はその色合いが「できるかな?」というより「不可能では?」の方が濃いことがあります。

周りの人たちから長い間「あなたには、



晴 | 雨 | 計

こういう障がいがあるから無理」と言われ続けられれば、それは仕方ないかもしれません。でも、健常者になつて得手不得手があつて、よく得手な部分を伸ばせといわれま

す。どうしてアダプティブだと、不得手ばかりに

焦点があたつてしまうのでしょうか? 視覚に障がいがあれば聴覚を、下肢にまひがあれば上肢でバランスの補助を、など「残存機能を最大限に生かすこと」と「状態に応じたアダプター」の活用で可能になることが多いのです。

私は「無理」と決めつけてしまうことに違和感を持ち、その人が何かの影響でそう思い込まれてしまったことを「とても、もったいない」と思います。

けがの後遺症で、左右の脚長差が15センチ

Yes, You can do it!

あるゲスト。周りの人からは「立位でスキーは無理」と決めつけられていたようですが、きちんと立位で滑るようになりました。

事故で脊髄損傷となり、胸あたりまでまひのあるゲストもいました。1本のスキーで滑るチェアスキーは難しいとされているのに、現在では一人でスピードにのってゲレンデを滑走します。

下肢のまひが強い別のゲストは、普段は歩行も難しいくらいです。チェアスキー



1では、15センチも進めばバランスが取れずに転倒しました。最初はコースを降りるのに2時間半かかりましたが、いまでは10分かかりません。

ゲストに向けたキャッチフレーズ「Yes, You can do it!」(あなたはできる!)。できることが前提。そのために何が必要かと思考が前向きに変わる。私たちの日常生活も、こんな考えでいいと思いませんか?